

# 福島原発事故によって何が破壊されたのか

荒木田 岳（福島大学）

## はじめに

- \* 自己紹介に代えて
- \* 昨今の話題（東芝の決算問題、今村復興大臣の辞任、共謀罪etc.）～ 今日の話の結論  
5月5日付「日刊県民福井」1面トップ記事、原子力市民委員会特別レポート  
「原発立地地域から原発ゼロ地域への転換」→そもそも原発は地域振興策だったのか？  
cf. 中嶋久人『戦後史のなかの福島原発』…避難計画？

## I. 「終わりの始まり」としての福島原発事故

- \* 「終わった」のに続いている日常

取り返しのつかないことが起こってしまった。だからわれわれはこの寓話（ノアの方舟を指す——引用者注）を、とりわけ原発事故に重ねて受けとめることになる。この事故は現在も進行しており、われわれは文字どおり現実化した「大洪水」の翌日、来ることが信じられなかった「未来」の翌日を生きている…

（西谷修「『大洪水』の翌日を生きる」、ジャン＝ピエール・デュピュイ『ツナミの小形而上学』〔岩波書店、2011年〕の解説）

福島で、人々が政府の助けを待ち望んでいたときに、政府では福島問題から「社会」「眼前の生活」等々を守るために、福島問題を尻尾切りするのに躍起になっていた…

このときに感じた「この世の終わり」

- \* 3.11以前の枠組みで現状を分析するか、3.11後の枠組みで現状を分析するか  
→ 被災者の役割は？

## II. 政府の対応、地方自治体の対応、マスコミの対応

- \* 結論：「想定外」も「安全神話」もなかった！  
「原発事故は、起こることが想定されており、起こった際の対応も詳細にわたって決められていた」ということ

\* 本来行われるべきであったシナリオ

原子力災害発生の際の取り決め=原子力防災 → もとは東海村JCO事故がきっかけ

ex. 原子力災害対策特別措置法（原災法：1999年12月制定、翌年6月施行）その特徴は「予防原則」  
「原子力施設等の防災対策について」（防災指針）

原子力施設による異常事態の把握（異常事態の定義・基準）、周辺住民等への情報提供（その手順、窓口、担当者の明確化 etc.）、諸設備の整備（ERSS、SPEEDI、オフサイトセンターetc.）、「緊急時環境放射線モニタリング指針」「緊急時における食品の放射能測定マニュアル」「緊急被ばく医療のあり方について」など応急対策実施のための指針

注：対応は細かく決まっていた…事故は「想定」されていた、ということ

cf. 「安全神話」、未曾有の災害…

\* 実際のシナリオ

首相官邸の行ったこと…「原子力緊急事態宣言」発令の遅れ（当日19時過ぎ）、

住民避難の遅れ、矮小化

各種安全基準を軒並み変更。子どもまで含め、年間20mSv被ばく容認。「官製除染」→被災地の人権は？

マスコミの行ったこと…30km圏への記者等の立入禁止（cf.住民は残っていた）、他方での「安全」

報道、情報の隠蔽、ときには 改竄（SPEEDI、高濃度汚染データ）

cf. 1号機爆発シーンは、爆発の1時間以上後に全国放送（日テレ）

福島県の行ったこと…3/12に、県のモニタリングチームがテルル132を検出（6月まで隠蔽）。

3/19に放射線健康リスク管理アドバイザー2名（4/1にもう1名）を招聘、県内で安全  
宣伝を実施。4月1日から「がんばろう ふくしま！地産地消運動」を開始。

県教委は、放射線量も測定せずに授業再開を決定 etc.

\* 2つの問題「事故を発生させた問題」「被ばくを避けさせなかった問題」→いずれも避けられた

電源喪失→注水失敗→冷却手段喪失→炉心溶融というシミュレーション。それほど高くない津波でも冷却系機能停止→炉心損傷のシステムも停止。にもかかわらず、調査自体が隠蔽、対策はとられず。（添田孝史『原発と大津波』）

東京電力の事故対応～1Fの事故対応の問題点：被ばく回避のために必要な対策は採られなかった。基準以上の汚染が見つかった際、避難区域を拡大するのではなく、基準値の方を緩和した。食品の場合も同様。

→ いずれも、「過小評価に基づいて安全対策を怠った」ということが原因。

cf. 福井の場合を想定してみると…？

### Ⅲ. それゆえ、今どうなっているか

#### \* 汚染の続く場所に人々が留め置かれている問題

何世代も続く深刻な汚染、廃炉問題。これほどの汚染地に、これほどの人口が住んでいた例は過去にない…

これは何を意味するか？ 想定される被害、最終的には誰にもとることのできない責任… 見ぬふり…

#### \* 価値転倒

「政府・現在の生活・社会秩序を守るための事故過小評価・情報の隠蔽・改竄」が表のシナリオになり、「住民を守るために行われるべき原子力防災」が裏のシナリオになった

#### \* 価値転倒を正当化するために動員されたもの

「専門家」のご託宣 虚偽の連鎖…

#### \* なぜ、そうなったのか？

政府にとって、県庁・市町村にとって、経済界にとって、人々にとって…

#### \* 結論：壊れたのは「政府」だった、そして「社会」が壊れた

そもそも、原子力防災の柱は「住民をいかに放射線被ばくから守るか」ということであった

→ なぜか？ 放射能やそれが放つ放射線が有害きわまりないものだから

cf. 妊婦や赤ん坊へのレントゲン

→ それゆえ、原子力災害が発生した場合には、次善措置として被ばくを避けるための社会的な安全策を

→ しかし、現実には…原子炉をコントロールできなかったため、社会の方をコントロールしようとした

完全にコントロールされたのは放射性物質でも汚染水でもなく、まして事故を起こした原子炉ではまったくなく、メディアや情報であり、「専門家」たちの意見であり、被災地住民の行動であった…

だから、原発事故を「放射性物質をまき散らしてしまった物理的事象」とだけ捉えるのは一面的で、日本社会の「崩壊」の問題として捉える必要がある。

→ 放射能汚染による被ばくを隠蔽しようとして社会が壊れた。

原発の再稼働、「アンダー・コントロール」、特定秘密保護法、安保法制、通信傍受法改正、「緊急事態条項」、共謀罪、さらにはオリンピック招致…まで 一連の流れ（福島事故の延長上）にある

## IV. 現状打開のために必要なこと

### \* 現状

社会から「信頼」やルールが失われている。論理や合意に基づいて社会が構成されていない。

→ 崩壊した社会をどのように立て直すかが課題

### \* 「脱被ばく」が目指した地平

政府とは別の「大義」=脱被ばく

立ち返るべき原点=事故前の安全基準 戦略としての「法令遵守」

→ ターゲットにした「層」→ それに対する反応 → 結果

→ 3.11後の枠組みで戦略を再構成する必要

向ける矛先、つながる相手、つながり方…

### \* 乗り越えるべき対象

「無力感」「被害者意識」…これが気易さの正体

「戦争は生き生きと日々悪意を懐いている人たちが起こしたもので、私たち純粋な市民とは関係がない」

果たしてそうか？ …一人ひとりの力は案外大きい。何か1つのテーマだけでも検証してみる。

### \* 作られた「無力感」、抑圧された「主体性」

人々の主体的関わりを排除しようとする力…「専門家」、物言い：「科学的」、「客観的」、組織化された暴力

「自己抑圧」、口外できない「不安」、誰にも相談できず一人で悩むこと…これを助長する人々

→ これらを乗り越えて、自らの足で情報を集め、自分の目で見、頭で考え、自分の口で発信する人に！

## おわりに

仮に原発をやめても、福島事故は終わらないし、放射性廃棄物が消えてなくなるわけでもない…

しかし、大洪水の翌日にも私たちは生きていかなければならない。

だから、どう生きるかが問われている。

どうもありがとうございました。